私の戦争体験記

鈴木くら（上山町・80歳）

私は昭和七年二月十六日に結婚してわずか十年にして男女四人の子供にめぐまれました。平和な家庭で楽しい日々もわずか十年の期間でした。そして昭和十六年八月二十七日突然赤紙召集令状がまい込み、夫の入隊が九月一日と定められて居ます。夫は海軍で現役三年間勤務して居りますので、もしかしたら召集令状が来るのではないかと覚悟はして居りましたが、やっぱり来て見ると驚きました。お父さん、お母さんは二人とも若死にしてしまいまして本当に残念です。

今、家で一番大切な親方が入隊とは、あとは西も東もわからない子供四人と私だけです。其の時長女がかぞえ年八才、長男が六才、次男が四才、三男が一才の誕生の二ケ月前の事でした。私が此の家にお嫁に来た時はお父さんが49才、お母さんは45才で前年の暮の14日にお亡くなりになったと聞きました。主人の妹さん達は三人居ましたが皆さん美しくてお利口さんでした。お父さんの御両親お二人共八十歳を越して居ましたが、仲々お元気で屋敷内の離れ家に住んでましたので、私が朝早くおきて水をくんで運んで上げるのが毎日の日課でした。其の頃は水道がなくてどこの家でもがちゃんがちゃんと音を立てるぽんぷ井戸でした。甚しい家はまだつるべ井戸さえも有った時代でした。八十才を越してこしの曲って居るおばあさんが、私が水をくんで行くと喜んでにこにこと笑ってむかえて下さるおばあさんのお顔が今でもわすれる事が出来ないのです。夫の妹さん達は皆さん美しくてお利口さんでした。私が嫁いで来た翌年に二人共一年の内に結婚してしまい、残された一番末の妹は結かくで毎日の通院です。それでもお父さんが急病でたおれた時には船橋市宮本町の兼坂病院に入院された時は昭和十年四月二十八日でした。妹娘の手厚い看護でお父さんは三十日余も命長らへる事が出来ました。そしてお父さんは昭和十年六月三日、遂にお亡くなりになったのです。あの年は雨がふらなくて水がなくて田植えもおくれ、小麦もあからみがおくれて丁度お父さんの死亡と一緒で御近所の方々には一そう御迷惑をおかけして申し訳ないと思いました事は今でも忘れる事は出来ません。おばあさんの死亡昭和十一年一月十六日、八十七才。書きおくれましたが、おじいさんは昭和七年九月二十八日にお亡くなりになりました。

昭和十三年一月二十六日一ばんすえの妹さんがお亡くなりになりました、二十四才。結婚前でしたのです。本当に気のどくでなりませんでした。

其の頃の日本の農家は何を作付けしてもみんな供出、供出で苦しめられました。でもそれも皆国民のおたがいのたすけ合の為で有ると思えば苦しい事も何のその、喜んで何でも言われた通り協力しましたが、私の近所にはこんな家が有りました。名前は出せませんが、家はむすこが召集されて

居るから供出はごめんですと、言って何も供出しない家が有りました。私は見て居てあの人は本当に非国民だなあ、私はあんな人間にはなりたくないと思いました。私は供出は何としても上からきめられただけはきちんと出さないと気がすまないので、役員さんがある日家に来てお宅は作付けがこれこれだから、薩摩芋の供出を三俵出して下さいませんかと言って来ました。はいわかりました。よく日朝早くおきて一生懸命一人で芋ほりして午後二時頃ようやく出来上りましたので、役員さんの家にかけていって薩摩芋三俵出来上りましたからどうぞお願いしますと言ったら、あれおそかったね、もうみんな出来上って中山迄持って行きましたよと言われてがっかり、家に返って来て見ると丁度良く馬があそんで居ました。小さい子供達に聞くと今日は馬方のおじさんが都合悪くて馬を引いて行かれないんだって（お母さんに言え）と言ってかえりました。私はあら、そう、そんなら丁度いいや、家の馬車にのせ中山迄私が行って来ると決心して馬に馬車を用意して畠に行って出来上った芋俵を馬車にのせて行きました。今思うと良く私にあんな仕事が出来たんだな、私も若い時は大分力が有ったんだなあと自分で自分を感心して居ります。八十才の今は足がいたくなったり、腰がいたくなったりして本当にあきれて居ります。その三俵の薩摩芋（一俵の目方十四貫です）を馬車にのせて、市川市中山の十字路の供出出荷所迄無事に付きました。出荷所の役人が私の顔を見るなり「おばさん、おばさん一人でこの芋俵を造ってきたの？」「そうですよ、だって家には大人は私一人しか居ないですもの。あとの人は四人居るけど皆小さな子供ですもの」。おばさん西の空見て、あれが入道ぐもと言って、あれが上がると雷様が来るんだよ、早く帰りなさいよ。はい伝票もって、はい有難とう御座います。早く返りましょうお馬さんと言ってかえろうとしたとたん、ぴかぴかごろごろと遠くの方でちいさな音で鳴り出して来ました。もうなり出して来ました。ね、これから一里あまりの道を帰るのだから大変だよ。さあ急いで下さいよと言うと馬は利口な動物ですので、私の言う言葉を聞きわけて急いでくれました。深町の坂をのぼって中山競馬所迄来た時、大つぶの雨がぽつんぽつんと私達に降りかかって来ました。あゝ大へんだよ、まだ家迄は二キロ以上も有るのにここでこんな大雨にふられたらと言ったとたん、ばけつで頭から水をかけられた様な降り様。あたりは真暗、雷雲にすっぽり包まれて居るではありませんか。ごろごろ、ぴかぴか、ごろごろ、ぴかぴか、やめどなくなって居ます。こわくてこわくて生きて居る心地なく、其の時思い付いた事は（こうくうたいそく妙王そくたいじつぽうこうくうしんこうくう）、これは富士浅間様の御心言で有る事を、私が子供の時に実家のおじいさんに教えてもらった有難い御神言で有ります。身にきけんが有った時は必ずこの御神言をわすれずにとなえなさいよ、と教えられた事をハッと思い出して力一ぱい御神言をとなえ始めました。其の時、馬の後足の三十センチ位離れた所にゲートボールの三倍ぐらい有る火の玉が落ちて来ました。光りと同時に雷様が落ちて音は後から耳がさける程の大きい音が鳴り出して、馬も私もおどろいてもう生きている心地がなくなり、それでもまだ力一ぱい御神言をやめずにとなえて居ました。馬を見ると、馬はよほどおどろいたとみえて前足二本そろえて高く飛び上がり、後の足も又二本そろえて飛び上がり、早い事、早い事まるで猛獣の如くでした。これ、お馬さんあわてるな落付け、落付け、あわててけがしたら大変だよ。もう家は近いよ、もうすぐだよと言って居るうちに、時間が十分位有ったでしょうかその家の門の前迄来てしまって、右にくるっとまがって馬小屋の前迄来てぱたっととまって立って居る。馬は直立不動のしせいで立って

居る。私は馬を見ながら大急ぎで馬車から飛びおりて、私はそこの馬小屋ののき下に下げて有ったタオルで馬の体の雨水をふき取って上げて、もちろんタオル三、四枚がびっしょりになりました。今度はかわいた藁で馬の足四本を力一ぱいこすって上げて、馬小屋の中に入れて飼葉を与えてすぐ三十メートル離れてる我家の土間にかけ込み、あゝ大きな雷様だなあ。その前に子供達四人は私が我家にはいるのが待ち切れなくて、お母さん、お母さん、早くきて、早くきて頂戴、早くきて頂戴と四人の子供が大ごえでなきさけんで居るのを聞きながら、馬の世話を素早くして我家の土間にかけ込んだ。九歳になった長女の昭子ちゃんが、あらお母さん頭からびっしょりですよ、かわいた所は少しもないわ早く着替えないと風邪引いてしまいますよ、と言いながら奥の部屋に行って着替えを持って来てくれました。三人の小さい弟達はまだ私のぬれた身体にすがり付いたまゝ泣いて居る。お母さん、私お風呂をわかして御はんもたきましたよ。お母さんがお風呂上ったら御飯にしましょう。ねえあなた達お母さんにしがみ付いて居ないで早くお母さんをお風呂に入ってもらいなさいよ。やだやだぼくもお母さんと一緒にお風呂に入るんだもん。まだぴかぴか、ごろごろ雷様はまだ其のへんにうろ付いて居てこわいよ。お姉ちゃんにおどかされてお姉ちゃんと一緒にお勝手に行って御飯を食べてなさい。私がお風呂を上って行くと、お母さん先に始めましたよ、いいよ沢山食べなさいよ。あゝ女の子は九才でこんなに気がきいてくる物かしら、有難いなあ、嬉しいなあ、其の夜さっそく夫に手紙を書きました。長女の昭子ちゃんの成長した事、供出の事、かみなりにあってこわかった事、色々少しづつ書いて出しました。主人はいつもの通り私の事は心配しないで下さい。それよりお前の体を無理しないでおくれ。子供達を大切に頼むよ、と忘れずに書いて有りました。次男の賢治が生れた時、小学校卒業した他人の女の子を白井町から頼んでましたが、其の女の子の父親が酒のみで、五年先のおきゅう金を先借りしては自分の子供をあっちの家こっちの家と子供をてんてんと入れては金を借りてお酒を呑んでしまう父親でした。其の子は私の家で三年半程居たが、酒呑みの父親の為に他の家につれられて行きましたが、家に居た事を思い出してはかなしんで居ました処、我が主人の召集された事をどこからとなく聞いて我家に来て、お父さんが召集されたですってね……、私を頼んで下さい。私、お父さんが返る迄一生懸命働きますよ、と言って来てくれましたので私も喜びました。では今迄の家にどのくらい借金が有るの、それはみんな私の家で払って上げるからね、心配しないで下さいね。お母さん、と言って其の日から我家で働いてもらいました。名前は金子光志と言うお名前ですのでお光志、お光志と呼んで居ました。

仲々気持の良い子ですので、私も子供が一人増えた様な気がして嬉しかったです。私もう実家の父親がむかいに来ても絶対に返らないからね、と言って気持良く働いてくれて本当にたすかりました。

実姉の夫、桑島金之助召集令下る。船橋市本町三丁目桑島家畜医院に結婚して居るお姉さんの夫が召集になって、此の人は一年しがんの少尉ですので除隊して十何年近くなって居たので、年も多く子供も長男は早稲田大学の四年生にもなって居ましたのです。単独で上海の自分の我が部隊迄行く途中、弟（私の夫）の鈴木平一の部隊に面会して二人で写真を撮って楽しい一時を過した様です。其の写真を送ってよこしましたが、夫は病院に入院中の為少々やせて居ましたが、お兄さんに会えた喜びで元気になって少々散歩して見ましょうと言ってうかうか歩いて居る内に、上海の町はづれ迄来てしまった時、お兄さんあれは正に支那の警備隊ですよ。日本兵と見な

されたら早速打ちころされますよ、と言って引返したそうです。

昭和十八年十二月末日、夫から何の通知もなく突然自転車の後の荷付けに大きな柳ごりを付けて家の門から飛ばして入って来るのを見て私は驚きました。夢かしら、貴方どうしました、軍服も着ないで。やあ今はね、とてもとても非常事態でね、軍服でまごまごして居たらね、すぐ憲兵につかまってしまうからね、中山の妹の家でお兄さんの服をかりて着がえて着て来たのさ。昨夜横須賀海兵だんに着いたが、自家に近い人は明日午後六時迄にかえれる人は自家に行って妻子の顔でも見てこいと命令されたので来たのだ。今日は何が何でも午後の六時迄にはかえらなければいかんのだからすぐかえる。みんな大分大きくなったなあ…、お母さんの言い付けをまもって居るだろなあ。風邪をひかない様に気を付けてね。子供達も元気な姿で安心したよ…。このこりの中は全部冬物ばかりだから、これから南方へ行くのだから冬物はじゃまになるから持って来たのだ。子供の顔も見たかった。お前も身体に気を付けてね。頑張っておくれよ。南方に着いたら手紙をよこすよ。御茶一ぱいのんだだけで三十分もいないですぐかえって行ってしまいました。明日から横須賀海兵団に南方行きの準備のため、何日か滞在して居るとの事でした。私は明日、高根の実家に行ってお兄さんにお話して、兄妹二人で横須賀に面会に行こうとした時、桑島さんの早稲田大学四年生の長男が、僕も一緒に行きますと言って一緒に来てくれましたので大人三人と末の子供三才をつれて行きました。それが最後の別れとなりました。

昭和十九年の一月六日付の葉書が台湾より参りました。それからずっと長いこと十一月の中頃迄は一通の手紙も来ないので、心配ばかりしてました。台湾に何日か滞在して居たのかわかりませんが、台湾を出発して南方へ行くと言って居られたから南支那海まで通った時に敵船と出あい、戦い攻撃されたものと思われます。昭和十九年十一月末になって、ようやく直接公報が飛び込みました。「海軍一等兵鈴木平一殿南支那海に於て名誉の戦死をなされました。」との公報が来ました。開いてみると十九年五月四日未明の戦死となって居ります。私は尚おどろきました。どうしてすぐおしえてもらえなかったのでしょう。私は尚々大かなしくて市役所からのおつかいのお方がお帰りになった後は大ごえで泣きました。本当に戦争ほど悲惨な事は有りません。どうして早く教えて下さらなかったでしょう。政府は戦争を止めさせてくれなかったでしょう。何千万の大切な国民をうしなってしまって、本当に残念で成りません。昭和十八年に良いチャンスが有った事を聞いてます。其の時停戦したならば、日本の損害も少々ですんだでしょうにと思うと本当に残念でたまりません。海軍にはこの様になる事はわかって居たようですが、当時の陸軍大臣が如何にも頑張るので仕方なく一ケ年のばしてもう是以上戦は出来ない迄になって、天皇陛下の停戦の命令となりました。本当に残念でした。昭和十八年に停戦したなれば、沖縄、朝鮮、満州、台湾、からふとなど敵に取られなかったでしょう。

昭和二十年になると、敵機の来襲が昼となく夜となく無差別に其の度を加え、二月は一番寒さ厳しい時期ですのに二月二十八日には大雪で有りました時、夕刻になったらB29の空襲に逢い焼夷弾の投下益々はげしく、我が町でもあちこちで火災があり実に五人の子供をかかえ生きた心地なく毎日を過ごして居ました。西の空を見ると真赤になった飛行機が無数飛んで居る。なかには火だるまになって落ちるのも有り、民家は焼けて火の手が真赤になってぼうーと火の手が上がる様子がこの目に見えるのがおそろしい感じで、身も心も何とも言い様の無い気持でした。終戦になった今日、

四十四年経った今日では、私はもう今年は八十才になり子供達も皆それぞれ縁づき、子供も大きくなり孫まで有る人さえおります。なかには薬品会社の取締役で社長代理をつとめて居る子も居ます。母一人の手で苦しみながらも実直に育てたかいが有ったと私は思います。それもこれもみんな御先祖様のお蔭様と私は感謝して居ります。もう戦争は絶対にしてほしく有りません。どうか政府の方々戦争をしないようよろしく御願い致します。

